

## 法然仏教学研究センター 2025年度全体研究会

### 〈第1回〉

日 時：2025年4月25日（金）

参加者：16名

- ・センター長あいさつ
- ・2025年度活動方針について
- ・各班進捗状況発表

### 〈第2回〉

日 時：2025年5月30日（金）

参加者：14名

- ・研究発表

発表者：下端啓介（当センター嘱託研究員・本学非常勤講師）

テーマ：法然『無量寿経釈』の「古層」の検討—流通分「当来之等文」の段落に注目して—

要 旨：法然が文治六年の頃に東大寺において「浄土三部経」の講説を行った際の講義録とされる『無量寿経釈』には、いわゆる「新層」と「古層」が存在するということが指摘されている。『無量寿経釈』にはいくつかの版本が現存し、浄土宗第八祖聖聡の『大経直談要註記』巻一に玄義分として収められている『無量寿経釈』も含め、その全てに広本『選択集』が機械的に付け加えられている。本発表では、『無量寿経釈』における流通分の一部に範囲を限定して、諸本の文言の異同を比較することで「古層」の解明に取り組んだ。その結果、『無量寿経釈』諸本においてこれまで議論されてこなかった『選択集』の挿入箇所（持戒・菩提心の説示）を指摘した。また、諸本間の異同から『大経直談要註記』所収の『無量寿経釈』の成立が先であり寛永版『無量寿経釈』の成立が後であることを論じ、両者の成立過程を示した。

- ・各班進捗状況発表

### 〈第3回〉

日 時：2025 年 6 月 27 日（金）

参加者：15 名

・研究発表

発表者：服部純啓（当センター嘱託研究員・知恩院浄土宗学研究所研究助手）

テーマ：珍海浄土教における三界の撰不撰

要 旨：珍海（1092～1152）撰『決定往生集』（1139）の第一「依報決定」では、極楽が十方浄土の中で事相麁浅の最下品土であると定義している。これは浄影寺慧遠と吉蔵に依ったものである。その上で珍海は曇鸞と道綽の名をあげ、自身の極楽観を補強している。このような珍海の極楽観は、先行研究において慧遠と吉蔵に依ったものであると指摘がなされている。本発表では、珍海が極楽を輪廻の境涯である三界の内にあると解釈しているのか否かという点に注目し考察を行った。

・各班進捗状況発表

〈第 4 回〉

日 時：2025 年 9 月 19 日（金）

参加者：12 名

・研究発表

発表者：坪井 剛（研究員・本学仏教学部准教授）

テーマ：明治期における知恩院と用達組合

要 旨：一般に、明治期の知恩院が財政的苦境に陥ったことは、辞書や先行研究等でも説明されており、そこからの脱却についても、明治 20 年代に特別寄付金と特別信徒待遇を開始したことが重要であった点を指摘している。ただ一方で、当該期の知恩院におけるこれら以外の取り組みについては十分検討されておらず、当該期の知恩院を取り巻く状況には検討の余地があるものと考えられる。そこで本報告では知恩院用達各社に係わる史料を読み解くことから、近代における知恩院用達の組織化について検討するとともに、この動きを明治期における知恩院を取り巻く状況との関わりから考察した。

・各班進捗状況発表

〈第 5 回〉

日 時：2025年10月24日（金）

参加者：12名

・研究発表

発表者：曾和 義宏（研究員・本学仏教学部教授）

テーマ：感応思想と『瑞応刪伝』

要 旨：感応思想とは、中国仏教における救済論の一つの表れであり、仏と衆生の関係性について論じるものである。感応思想においては、衆生の「機」が聖人に働きかけるとされ、その働きかけを「感」とする。聖人は衆生からの「感」を受けて、衆生に対して応現・教化を発動する。これを「応」とする。『往生西方浄土瑞応刪伝』（『瑞応刪伝』）は、その名称の通り西方浄土に往生することを「瑞応」と捉えているが、その「瑞応」がどのような「感」働きかけによって発動したとされているのかを考察した。

・各班進捗状況発表

〈第6回〉

日 時：2025年11月28日（金）

参加者：17名

・研究発表

発表者：南 宏信（研究員・本学仏教学部准教授）

テーマ：法然諸伝記に見る修験者の諸相—摂益文と公胤夢告をめぐって—

要 旨：法然諸伝記には、静恵・直聖房・作仏房という三種の修験者関連譚が見られ、いずれも熊野修験と浄土教信仰の接点を示している。なかでも静恵法親王入寺は聖護院史上の転換点で、以後は皇族門主が検校職を兼ね、聖護院が修験道統括の中心となった。『九卷伝』・『四十八卷伝』に見える作仏房譚は「熊野権現＝阿弥陀如来」という本地垂迹説を明確化し、熊野参詣を往生の方便として再解釈する点で象徴的である。『四十八卷伝』はさらに「法然＝勢至菩薩」観を直聖房譚へと移し、公胤夢告を削除して修験的世界観の中で再構成した。静恵譚にもこうした修験的要素が及び、法然信仰の新たな理解が形成されたことを考察した。

・各班進捗状況発表

〈第7回〉

日 時：2026年1月23日（金）

参加者：13名

・研究発表

発表者：齋藤 蒙光（研究員・本学仏教学准教授）

テーマ：法然の「三心」解釈についての一考察

要 旨：法然は「三心」について、総合的に論じるならば諸の行法に共通する一方で、個別的には往生の行に関する説明し、善導の解釈は「通」を挙げて「別」を撰めていると分析している。本研究では、法然がそのように語る背景について考察した。『維摩経』に「直心は是れ菩薩の浄土。菩薩成仏の時、不諂の衆生、其の国に來生す」とある。浄影寺慧遠が主に浄土国土の修行に励む菩薩の側の「直心」に目を向けているに対し、善導はその浄土に來生する衆生の「不諂曲心」と結びつけて眞実心を解釈していると思われる。また善導は天台智顛所説の「五悔」を念頭に置いて三心を解釈している。もっとも智顛が衆生救済を行う側の菩薩の立場から五悔を説明するのに対し、善導は永く煩惱に翻弄され輪廻してきた衆生の立場を強調する。法然も、慧遠の「直心」解釈や智顛の「五悔」などと対比しながら『観経疏』の三心釈を讀解したと思われる。法然は、善導の三心は菩薩行を成就した阿彌陀仏によって救済されねばならない凡夫の立場から語られていると読み取りつつも、やはり仏道実践の基本的立場と共通するところがあると受け止めたのだと考える。

・各班進捗状況発表

以上